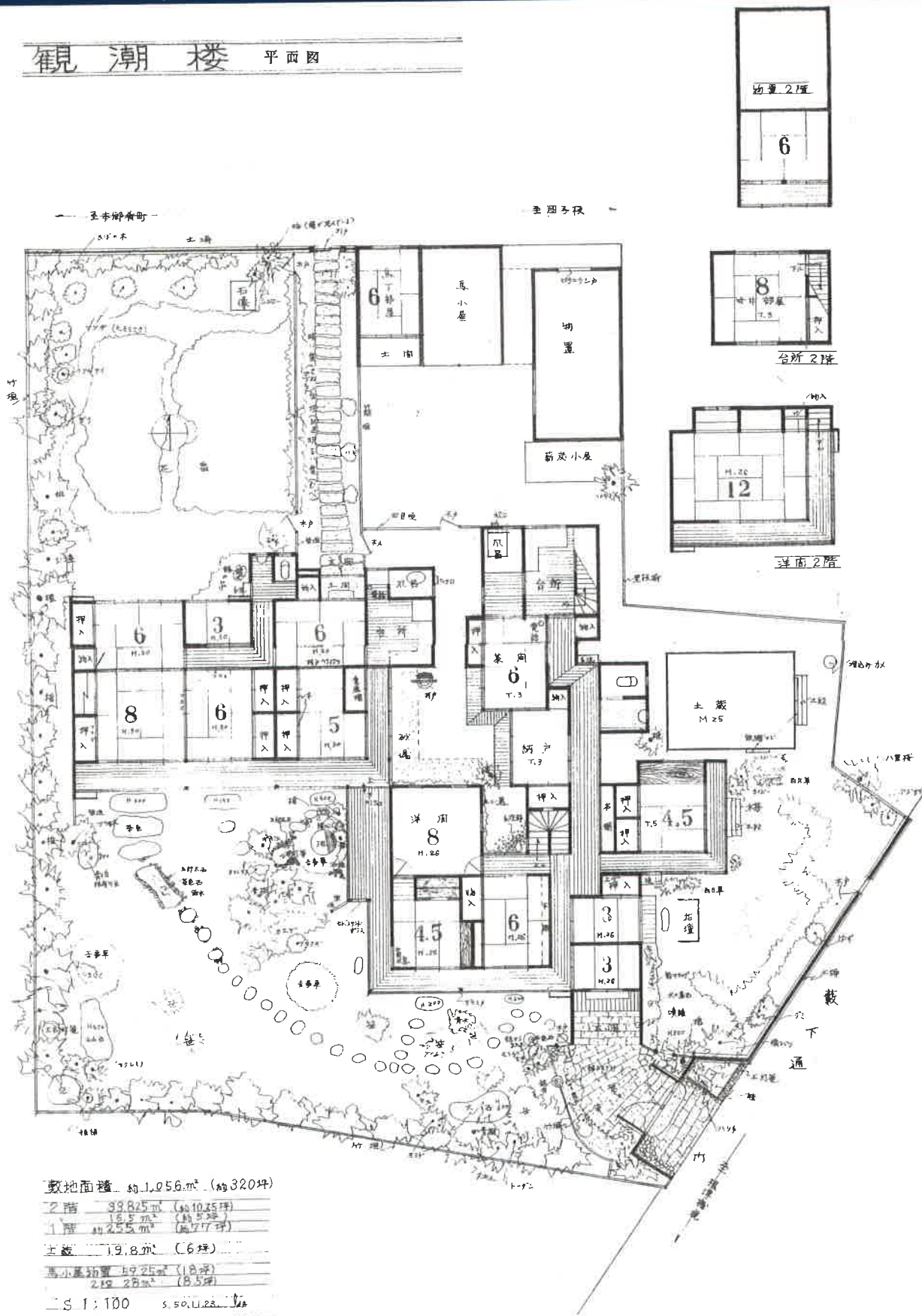


### 観潮楼 平面图



敷地面積	約1,956㎡ (約320坪)
2階	99.825㎡ (約1045坪)
1階	15.5㎡ (約37坪)
土蔵	約25.5㎡ (約6坪)
馬小屋跡	約25.5㎡ (約6坪)
	219.28㎡ (約53坪)
縮尺	1:100

### 目次

巻頭コラム「死を生きた人びと」小堀鷗一郎(新座市堀ノ内病院訪問診療医)／展示報告／ボランティア活動ノート／展示のお知らせ 特別展「森家の歳時記―鷗外と子どもたちが綴った時々の暮らし」／展示会場から／活動報告／主な寄贈図書一覧／これからの催しもの／ショップ便り／2020年度前期 開館カレンダー／編集後記

表紙：観潮楼復元図面

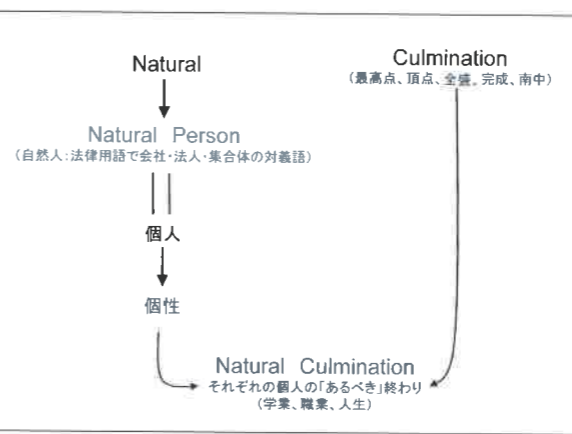
# 死を生きた人びと

「死を生きた人びと」は2018年5月にみずす書房から出版された拙著の題名であり、また2020年1月に開催された鷗外誕生日記念講演会の演題名でもある。私は都内の病院の外科に40年間勤務した後、埼玉県新座市に友人が開設した個人病院で偶然在宅医療に出会って15年が経過した。外科医の日常は基本的に救命・根治・延命が全ての世界である。周到な計画で立ち向かった困難な手術が患者の死に終わったときの敗北感・挫折感は自分以外の人間には決して理解できないという考えは現在も変わらない。死は紛れもなく敗北であった。そのような日常業務以外の世界で遭遇する死は両親を始めとして親戚、友人知人の死であり、マスメディアが報ずる死であった。マスメディアが報ずる死は事件性が無い限り、功なり名を遂げた有名人の死である。

在宅医療で遭遇する死はほとんど全て無名の市井の人びとの死である。社会が全く関心を示さない死、という表現は必ずしも妥当ではない。家族にも知られることがない死、そして家族が知っていても関心を示さない死もそれほど稀ではない。重要なことは、その一人一人に語るべき豊かな人生があり、彼らがその辿ってきた人生に深く根差した死に方を望んだ、という事実である。Culmination(カルミネーション)という言葉がある。辞書には最高点、頂点、全盛、完成、南中とあるが、意味するところはNatural Cmination: それぞれ個人の『あへべき』(学業、職業、人生)終わりである。

## 小堀鷗一郎 (新座市堀ノ内病院訪問診療)

パリの緩和ケア病棟勤務の心理学者マリー・ドゥ・エヌゼルの著書「死に行く人と共にいて」に寄せたフランソワ・ミッテラン(元大統領)の序文「死によって人間は自分が本来そうなるべき姿に導かれる」と正しく符合し、その人にとっての最も望ましい死といえるだろう。私の在宅医療の15年間は452人(現時点)の世を去った人々のCulminationを実現することであった。敢えて付け加えるならば、そのほとんどが負け戦に終わったということである。



昨年2月、静岡大学松田純名誉教授(倫理学)から「甘原の説」という森鷗外の安楽死に関する翻訳論文があることを教えていただいた。原著は1895年にマルチン・メン

## 展示報告

### コレクション展

# 「父と母」鷗外のファミリー・ヒストリー

会期：2020年1月18日(土)～5月10日(日)  
※会期延長

今回は鷗外の人生から少し時代をさかのぼり、鷗外の父と母に焦点をあてた展示を開催しました。展示は「鷗外の父と母」、「鷗外作品より」の2部構成をとし、1部では歴史的資料、2部では作品から鷗外の父と母に迫りました。

第1部「鷗外の父と母」では、鷗外の実父母・森静男、峰子の足跡を、館蔵の書簡や静男の著書、それぞれの筆録、写真等から展覧し、なかなか紹介する機会が無い、医師としての静男の姿を改めてご観いただきました。また、鷗外の妻・登志子、志げの両親について、館蔵の書簡や新聞記事、著書等からその姿や森家との関わりの一部を紹介しました。

登志子の父母のコーナーでは、鷗外と登志子の結婚が森家の遠戚・西周を仲立ちとしていたことを、写真や、周から静男に宛てた書簡を中心にひも解きました。志げの父母のコーナーでは、荒木家と鷗外の交流を、父・博臣の漢詩集『猶存詩鈔』や『鷗外日記』、博臣の顕彰写真等から示しました。新聞記事や鷗外の子どものための随筆等を通して、善良な則良、気丈な貞、真面目な博臣、話上手で賑やかな阿佐等、それぞれの父母の人物や姿も知っていたことが出来ました。

第2部「鷗外作品より」では、鷗外の著作を通して鷗外の記した父母像をたどります。「半日」「カズイシチカ」「本家分家」から、鷗外の描いた森家の父や母、家族の姿を追いました。戯曲『街の子』、歴史小説『山椒大夫』最後の一句からは、場所や時代を越えた親と子のつながりが見えてきます。作品毎に「あらすじ」、「鑑賞のポイント」をまとめたパネルを作成することで、作品を読んだことの無い方にも分かっていただけでは無いでしょうか。また、各作品から父と母に関する読みどころの1節を選び、資料と共に鑑賞していただきました。

展示のキャプション、鑑賞パネル、3組の父母の年譜は、ミニ展示ガイドに収録しました。この展示を通して、鷗外のルーツに明治、大正と時代の変わり目生き抜いたそれぞれの父母の姿を知っていただけたと思います。詳しくは当館までお問い合わせください。



第1部「鷗外の父と母」

第2部「鷗外作品より」

デルゾーンという医師が看護学雑誌に発表したもので鷗外の翻訳はその3年後の1898年である。そして原著と翻訳の比較考察を行ったのが富山県立大学工学部教養教育センター金城ハウプトマン・朱美准教授である(独逸文学60(47-76,2016)。金城ハウプトマン准教授の論文には、原文にあるのに鷗外が訳さなかった部分、逆に原文にないのに鷗外が訳出した部分が明示されていた。私はこの「書き足し部分」に鷗外の死生観が窺えるのではないかと考えた。しかしながら、そのような箇所は数か所に上るものの、一か所を除いて、いずれも鷗外独自の考えとみなされるものではないと私は考えた。例外的箇所は「医の應に行うべき所には、精神上の手段あり」という一文で始まる数行で、この書き出し自体金城ハウプトマン女史は原文にない訳文が、唐突に出現した」と評している。私が注目したのは、それに続く「病人をして生活の望を維持せしむることその最も重要なものなり。此望は醫の先ずこれを絶つこと、往々早きに過ぐ。是れ不慮の転脚の軽快を致すことあるべきを思はざるなり。」の数行であり、そしてその核心をなすのはLebenshoffnungという言葉である。私が訳者であればこれを「生きる望み」「生の望み」と訳出するであろう。後に続く「医者は患者が予測を超える病状の好転を示すことがあることを考慮せずに、しばしば早まった告知を行いがちである」という部分と整合性があるからである。しかし鷗外はこれを「生活の望」と訳した。ここに「生の望み」とは異なる余命、最期の日々の過ごし方、すなわちCulminationに通ずる鷗外の想いを感じるのには私の穿った考えであろうか。

ベルリン森鷗外記念館副館長のBeate Wonde女史はLebenshoffnungという言葉の意味についての私の問い合わせに対し、左記の通り、関連事業を開催しました。

- 講演会「(父性)としての峰子」  
日時：2月24日(月)・振休  
14時～15時30分  
講師：小仲信孝氏  
(跡見学園女子大学教授)
- 学生ギャラリートーク  
日時：3月1日(日)11時～14時  
跡見学園女子大学学生による展示解説を準備していましたが、新型コロナウイルス感染症予防対策のため中止となりました。
- 同時開催  
文の京ゆかりの文化人顕彰事業  
コーナー展示「鷗外と石川啄木」  
館蔵の石川啄木筆鷗外宛て明治41年5月7日付書簡を中心に、啄木と鷗外の出会いからその終焉までを、15点の資料でたどりました。



造語で定訳がないこと、自分は訳語としては「死に対する意識的な準備」すなわち「生きる喜び、生きていることへの感謝と考えるのが自然と思う。」と述べられている。いずれにせよCulminationそのものとも言いきるべき訳語といえよう。この論文が、鷗外が安楽死を扱ったとされる小説『高瀬舟より何年も遡った36歳の時に訳出されている事実も興味深い。

鷗外のCulmination、最期の日々をどのように過ごすことを望み、そしてその望を果たしたかに関しては森茉莉「父の帽子」の1節に付け加えるべきものは何も無い。父は黒い、丸くて太い、真直ぐな杖(それは最後の奈良の旅で買ってきたもので、あつた。)をついて、足を引き摺るようにして毎日役所に、通った。夕方になると再び杖をついて、帰ってくる。玄関に迎え来た母を見て、父は微笑して言うのであった。「俺は今日も健康な人間と同じに仕事をして来た。」その微笑は暗くて、寂しかった。母は父に静かにして寝ていて貰いたい。(そうしていれば、半年は生きられるのではないだろうか)母は思っていた、心の中に涙を流した。だが父は言うのであった。「何もしないでいるのは俺にとつては死んでいるのと同じだ。なんにもせずに寝ていて一年生きるよりも仕事をして一月で死ぬる方が、俺にはずっとうれしいのだよ。」

小堀鷗一郎  
こぼり・おういちろう

1938年・東京生。東京大学医学部医学科卒。医学博士。東京大学医学部附属病院第一外科、国立国際医療研究センターに外科医として勤務。退職後、埼玉県新座市堀ノ内病院に勤務し、在宅医療を行っている。

小堀氏の活動は2018年NHKB S1スペシャルで放映され、その後再編集され「人生をしまう時間」として映画化された。

森鷗外を祖父にもち、父は画家の小堀四郎、母は随筆家の小堀杏奴。

## ボランティア活動ノート

当館の展示ガイドボランティアは、土曜日・日曜日・祝日の午後1時～3時に活動しています。庭の説明から始まり、展示室1の常設展示部分を中心に、お集まりいただいた観覧者にガイドツアーをしています。展示ガイドボランティアの基本案内は常設展示部分ですが、年4回の展示替え春と秋は特別展、夏と冬はコレクション展を開催の時には、登録しているボランティア全員が学芸員のレクチャーを受けます。新しい展示についても毎回熱心に勉強をし、さらにご自身でも調べて、ツアーに臨んでいます。



レクチャーの様子

「森鷗外についてふれるのは初めて」「文学館の展示って難しそう」と思っている方、ガイドツアーに参加してみませんか。史跡や展示資料を通して、展示ガイドボランティアが鷗外について分かりやすく解説します。

# 展示のお知らせ



舞人形「公益財団法人日本近代文学館蔵」  
鷗外が杏奴へ買ったとされる。  
【期間限定展示】

## 特別展 「森家の歳時記」

### 鷗外と子どもたちが綴った時々の暮らし

文豪・森鷗外が観潮楼（現・文京区立森鷗外記念館）に家族と暮らしたのは、明治25（1892）年から亡くなる大正11（1922）年までのことです。この間の鷗外の日記には、作家、陸軍軍医、父親……鷗外のおさまな立場の日常が、淡々と記録されています。一方、鷗外の子どもの長男・於菟、長女・茉莉、次女・杏奴、三男・類が後年に記した回想には、鷗外との暮らしが、明治・大正期の東京の風物とともに端々しく描かれています。本展では、鷗外の日記や書簡、子どもたちの回想などをたよりに、森家の年中行事を通してその暮らしを照らし出します。また、大正2年の鷗外の日々、鷗外作品に描かれた季節を展覧します。いつの時代にも等しく時が流れ、季節がめぐります。森家が季節の移り変わりとともに営んだ観潮楼での暮らしや鷗外の季節表現は、現代のわたしたちが忘れてしまっている郷愁を呼び起こし、親近感を覚えることができるのではないのでしょうか。

鷗外の記録と子どもたちの記憶をつなぎ合わせることで浮かび上がってくる、正月、花見、川開き、避暑、クリスマスなど「森家の歳時記」をお楽しみください。

会期 ● 2020年 5月16日(土) - 7月26日(日)  
（会期中の休館日）5月26日(火)、6月23日(火)  
会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室1、2  
開館時間 ● 10時～18時（最終入館は17時30分）  
観覧料 ● 一般500円（20名以上の団体・400円）  
※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料  
※文京区と歴史館入館券、パンフレット（押印入）、友の会会員証ご提示で割引  
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご覧ください。  
監修 ● 須田喜代次（大妻女子大学教授、森鷗外記念館常任理事）  
協力 ● 公益財団法人日本近代文学館、世田谷文学館、台東区立下町風俗資料館、文京ふるさと歴史館（五十首館）



鷗外著『消滴』新潮社 明治43年10月  
部分の豆まきが描写された小説『追儂』  
所収。装丁は日本画家・平福百穂。

## 関連事業のお知らせ

「明治・大正期の年中行事と行楽」  
「鷗外日記と子どもたちの随筆から」

講師 鈴木章生氏  
（目白大学教授、品川区立品川歴史館館長）  
日時 6月13日(土) 14時～15時30分  
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室  
定員 50名（参加費と本展の観覧券（半券可）が必要）  
申込締切 5月29日(金) 必着

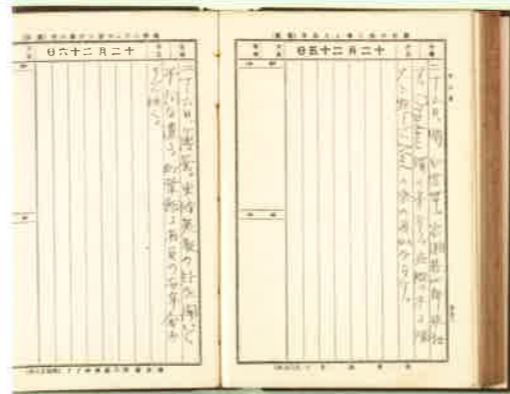
「千駄木の家の春、夏、秋、そして冬」  
「長い、長い、幸福な日々」

講師 須田喜代次氏  
（大妻女子大学教授、森鷗外記念館常任理事）  
日時 7月4日(土) 14時～15時30分  
会場 文京区立森鷗外記念館2階講座室  
定員 50名（参加費と本展の観覧券（半券可）が必要）  
申込締切 6月19日(金) 必着

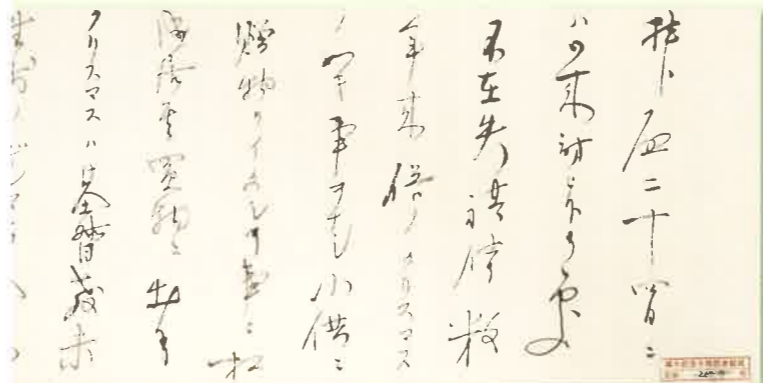
## ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。  
当日の申込不要、展示観覧券が必要ですよ。

5月27日(鷗外の次女・杏奴の誕生日)、  
6月17日  
いずれも水曜日14時～(30分程度)  
★納涼ギャラリートーク  
7月11日(土) 11時～(30分程度)



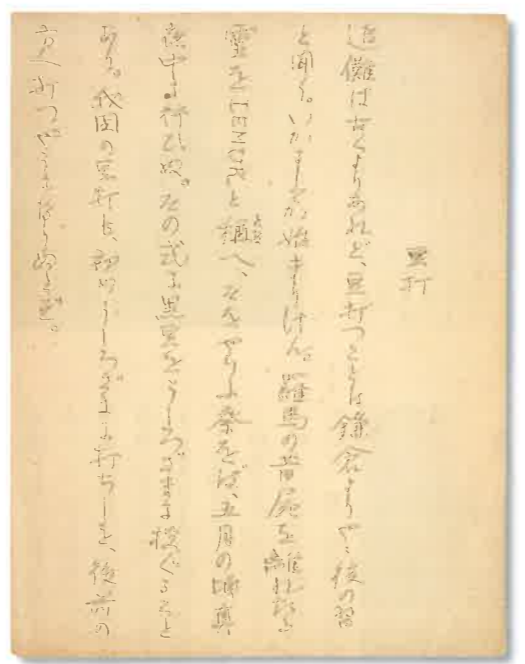
『鷗外日記』大正2年  
鷗外の日記からは、文業だけでなく、多忙な公務、幅広い人物交流、そして家族との時間を垣間見ることができる。



鷗外筆買古鶴所宛書簡 大正7年12月28日付(部分)  
子どものためにクリスマスプレゼントを買いに出かけたことが記されている。

## 展示会場から

### 鷗外自筆原稿「豆打」



【200181】

### 鷗荘

#### 森類自筆原稿(無題)

【300128】

【220083-1】

節分に行う豆まき(豆打)について、全1枚に文語体で書いています。この原稿の詳細はよく分かっていませんが、節分を扱った鷗外の短編小説に『追儂』(明治42年5月)があります。追儂とは本来、疫病などの鬼を追い払う儀式を指し、現在では節分に行われる豆まきがそれに当たります。

『追儂』は、小説を「どうして何を書いたら好かるのか」と思案するところから始まり、「何をどんな風に書いても面白いものだ」と結論づけます。そして、「ふと思いついた「豆打」の話をします。」

2月3日、築地にある料亭「新喜楽」に招かれた「僕」は約束までの待ち時間に「赤いちやんちやんこ」を着た「小さい菱びたお婆さん」が「極めて活々」と豆を時々のを見ます。「僕は、招待者「M.F.君」にこの「豆打」の話をしますが、「M.F.君」がもう一度やらせた「二度目の豆打は余り注意を惹かずにしまつた」のでした。

この小説の最後に「少し書き加へられたのが、以下の一節です。

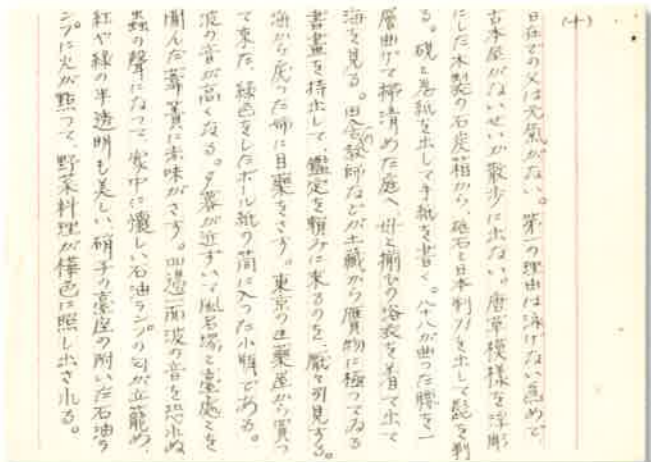
追儂は昔から有つたが、豆打は鎌倉より後の事であらう。面白いのは羅馬に似寄つた風俗のあつた事である。羅馬人は死霊を「Demi」と云つて、それを追ひ退ける祭を、五月頃真夜なかにした。その式に黒豆を背後へ投げける事があつた。我國の豆打も初は背後へ打つたのだが、後に前へ打つことになつたさうだ。

原稿「豆打」と小説「追儂」との関係は、現段階では分かっていません。しかし、追儂に豆まきを行うようになった時期、古代ローマの亡霊を追い払うための祭り(レムリア祭)への言及など、原稿「豆打」とほぼ同様の内容が書かれています。

鷗荘は、千葉県夷隅郡東海村字日在(現・千葉県いすみ市日在)にあつた森家の別荘です。鷗外が母・峰子の健康のために別荘を建てることにし、土地の選定と建築は峰子に委ねたといひます。峰子は潤三郎(鷗外の末弟)や於菟(鷗外の長男)を連れて下見を重ね、知人に紹介された日在の松原を気に入り、この土地に決めました。その後、観潮楼を手けた大工に建築を依頼、別荘が落成したのは明治40年6月のことでした。後年、別荘人口には洋画家・書家の中村不折揮毫による「鷗荘」の扁額が掲げられました。

日在の鷗荘を訪れるのは、森家の夏の恒例行事となりました。鷗荘は、鷗外の小説『妄想』(明治44年3～4月)や、鷗外の子どもの随筆に幾度となく登場します。鷗外の三男・類は「父がいるかぎり傍にいれば楽しかったが、年に二度の大きい楽しみがあつた。夏は千葉県日在村の別荘へ行くことと、冬のクリスマスであつた」、「杏奴も僕も、無我夢中で声を張りあげ、浮袋に腰をかけて流されてみたり、砂で山をつくらしたりして遊んだ(鷗外の子供たち)」と回想しています。子どもたちにとって、鷗荘へ行くことがいかに楽しい出来事だったのかが分かります。また、類が書き残した原稿には、鷗荘での鷗外の様子を描かれ、あまり語られて来なかつた晩年の鷗外的一面を垣間見ることが出来ます。

日在での父は元気がない。第一の理由は泳げないため、古木屋がないせいしか散歩に出ない。唐草模様を浮彫にした木製の石炭箱から、砥石と日本剃刀を出して髭を剃る。硯と巻紙を出して手紙を書く。八十八(注・使用人)が曲つた腰を一層曲げて掃清めた庭へ、母と揃ひの浴衣を着て出て海を見る。(類「無題」)



# 活動報告

文学座俳優・今井朋彦氏

永井荷風の『日和下駄』を

朗読しました

12月21日、特別展「永井荷風と鷗外」の関連企画として、荷風を代表する随筆『日和下駄』を文学座で活躍中の俳優・今井朋彦氏（写真右）に朗読いただきました。『日和下駄』は、東京で生まれ育った荷風が、東京を散策しながら独自の視点で描いた随筆です。全11章から抜粋した、60分の朗読となりました。満員の会場は水を打ったような静けさで、参加者は今井氏の朗読に耳を傾け、終了と同時に大きな拍手が沸き起こりました。朗読の後は、同



文学座俳優・今井朋彦氏による『日和下駄』の朗読の様子。

今年の鷗外誕生日記念イベントは

小堀鷗一郎氏をお迎えしました

1月19日は鷗外の誕生日。毎年、様々な企画で誕生日をお祝いでいます。今年は誕生日に先駆け、1月11日に「死を生きた人びと」という演題で、小堀鷗一郎氏に講演いただきました。小堀氏は、埼玉県新座市堀ノ内病院にて在宅の終末期医療に携わっておられ、その様子はNHKでドキュメンタ

リ番組になり、また「人生をしましう時間」として映画化されました。鷗外のお孫さんとしてご存知の方も多く、会場は満員御礼となりました。講演後は、死をどう迎えるか、家族の看取りについて、など現実的な質問も多く挙がり、実り多い講演会となりました。



小堀鷗一郎氏の講演の様子。

クリスマス、ライアーの

コンサートを開催しました

12月15日、MOGカルテット(写真上)によるクラシックコンサートを開催しました。特別展「永井荷風と鷗外」にちなんで、二人が聴いたとされる曲やクリスマスソング、チェンバロも加わったヴィヴァルディの「四季冬」などを演奏。毎年の開催を楽しみに足を運んでくださった方々と一緒に、「もうひとこぞりで」を合唱しました。また、年が明けた1月19日の158回目の鷗外誕生日には、三野友子氏(写真下)にミニ竖琴・ライアーを演奏いただきました。ライアーの優しい音色に、多くの方が耳を傾けていました。



クラシックコンサートとミニ竖琴・ライアー演奏の様子。

## 主な寄贈図書一覧(2019年1月〜12月)

左記の貴重な資料を文京区立森鷗外記念館にご寄贈いただきましたありがとうございます。鷗外研究のための貴重な資料として、未永く保存・活用させていただきます。

### 【著者寄贈】

佐々木史著「鷗外と村山樵多の(もや)」神奈川新聞社 2019年1月  
 『日本文学』第67巻第8号「日本文学協会編刊」2018年8月 ※田中実著「近代小説の神髄は不条理、概念としての『第三項』がこれを拓く」鷗外初期三部作を例にして「収録」(書庫部紀要)第70号 宮内庁書庫部 2019年3月(抜刷)  
 萩原雄一現代語訳「鷗外・ドクトル青春日記」森鷗外著 未知谷 2019年6月  
 田中実・須貝千里「難波博士編」第三項理論が拓く「文学研究」文京区立森鷗外記念館蔵 21世紀に生きる読者を育てる「明治国語」2018年10月  
 今野寿美著「森鷗外短歌」という詩型に生涯愛情を持ち続けた文豪 笠間書院 2019年2月(コレクション)日本歌人選(6)

### 【発行所寄贈】

『詩歌の森 日本現代詩歌文学館報』第85号「日本現代詩歌文学館」2019年3月 ※「鷗外」として表現することの意味 山崎一 著者収録  
 『国語と国文学』第96巻第12号「東京大学国語国文学会」編 明治書院 2019年12月 ※「大塚美保著」読者を巻き込むテキスト 森鷗外「百物語」収録  
 吉見松香著「吉見松香書展」森鷗外の言葉をモチーフに 2019年11月  
 『型の花通信』第68号「中野重治の会編纂部」編「中野重治の会」2019年12月 ※「中野重治」鷗外とその側面を読む 山崎一 著者収録  
 『文芸研究』第138号「明治大学文学部文芸研究会」2019年3月 ※「特集 森鷗外新資料発見」  
 『日本文学研究』第9号「宗像和重ほか編」古典ライブラリー 2019年3月 ※「巻頭エッセイ」鷗外はアイヌの少女・知里幸恵に会ったか 山崎一 著者収録  
 『夏目漱石展』第68号「秘録」2019年11月  
 『大学時報』第68巻3号「5号通巻399号」日本私立大学連盟 2019年3月 ※「ずいそう」改元を思ふ 山崎一 著者収録  
 『文学同好会』カワセミ第2号 2019年9月 ※「鷗外と静岡」尾崎朝子著者収録  
 『聖心女子大学論叢』第132号「聖心女子大学編刊」2018年12月 ※「読者」とは誰か? 「鷗外」百物語論のための予備的考察 大塚美保著者収録  
 『中村不折 書道博物館創設者 画家として、書家として』台東区立書道博物館 台東区文化産業観光部文化振興課 2018年9月  
 『文芸研究』第138号「明治大学文学部文芸研究会」2019年3月 ※「特集 森鷗外新資料発見」  
 『日本文学研究』第9号「宗像和重ほか編」古典ライブラリー 2019年3月 ※「巻頭エッセイ」鷗外はアイヌの少女・知里幸恵に会ったか 山崎一 著者収録  
 『夏目漱石展』第68号「秘録」2019年11月  
 『大学時報』第68巻3号「5号通巻399号」日本私立大学連盟 2019年3月 ※「ずいそう」改元を思ふ 山崎一 著者収録  
 『文学同好会』カワセミ第2号 2019年9月 ※「鷗外と静岡」尾崎朝子著者収録

## ショップ便り

ミュージアムショップでは、ふみの日のイベントの一環として2月23日から小さなブックフェアを行いました。今回は、2019年に文京区から台東区へ移転した書店「古書ほろろ」にご協力いただき、手紙にまつわる書籍の選書をお願いしました。



ブックフェアの様子

普段は森鷗外に関連した書籍が多く並ぶショップの書棚ですが、ブックフェアでは手紙というテーマで、往復書簡集、児童書、詩集、海外の小説など様々な種類の古書が並びました。どれも読んでみないとわからない楽しさがあり、普段とは違った景色が新鮮でした。ショップに並ぶ書籍やグッズは展示やイベントによって内容が変わる場合があります。1階ミュージアムショップやカフェは観覧料不要でご利用いただけますので、お気軽に覗いてみてください。

## 鷗外パス キャンペーンのお知らせ

当館で発行している年間観覧券「鷗外パス」を、特別展「森家の歳時記——鷗外と子どもたちが綴った時々の暮らし」期間中に継続または新規購入いただいた方を対象に、「森鷗外記念館オリジナル鉛筆」をプレゼントします。また、ご紹介いただいた場合は紹介者の方にもプレゼントします。有効期間中(発行日から1年間)は何度でも展示を楽しめて、1200円というお得な観覧券です。高校生以上ならどなたでも購入可能です。この機会に、鷗外パスの購入をご検討ください。

- 有効期間中は何度でも展示をご覧ください。ご利用はご本人に限ります。
- ご希望の方には、当館発行の館報(年4回)および展覧会案内を送付します。
- モリキネカフェで鷗外パスを提示すると、ドリンクを2割引でご利用いただけます。
- 観覧ごとに押印するスタンプ5個でモリキネカフェのドリンク1杯、10個でドリンクとお菓子のセットをプレゼントします(10個たまった時点で特典は終了です)。
- 鷗外パス提示で他館施設が割引料金でご利用いただけます。詳しくはお問い合わせください。



## これからの催しもの

催しは◎以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。  
 ★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

6月13日(土) 14:00~15:30 展示関連講演会 「明治・大正期の年中行事と行楽——鷗外日記と子どもたちの随筆から——」 講師：鈴木章生氏(自白大学教授、品川区立品川歴史館館長) 会場：講座室 定員：50名 料金：無料 ※要展示観覧券(半券可) 申込締切：5月29日(金)必着	7月4日(土) 14:00~15:30 展示関連講演会 「千駄木の家の春、夏、秋、そして冬——長い、長い、幸福な日々——」 講師：須田喜代次氏(大妻女子大学教授、森鷗外記念館常任理事) 会場：講座室 定員：50名 料金：無料 ※要展示観覧券(半券可) 申込締切：6月19日(金)必着	6月28日(日) 10:30~12:00 鷗外講座応用編「鷗外宛書簡から学ぶ⑤」 講師：宗像和重氏(早稲田大学教授) 会場：講座室 定員：45名 料金：無料 申込締切：6月17日(水)必着 教材に『文京区立森鷗外記念館蔵 森鷗外宛書簡集1 賀古鶴所』(平成29年)を使用します。予めご用意の上、ご参加ください。	6月28日(日) 13:30~15:00 鷗外講座応用編「鷗外宛書簡から学ぶ⑥」 講師：宗像和重氏(早稲田大学教授) 会場：講座室 定員：45名 料金：無料 申込締切：6月17日(水)必着 教材に『文京区立森鷗外記念館蔵 森鷗外宛書簡集1 賀古鶴所』(平成29年)を使用します。予めご用意の上、ご参加ください。
--	---	--	--

5月31日(日) 10:30~12:00 鷗外講座応用編「鷗外宛書簡から学ぶ①」 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念館常任理事) 会場：講座室 定員：45名 料金：500円(教材費) 申込締切：5月15日(金)必着	5月31日(日) 13:30~15:00 鷗外講座応用編「鷗外宛書簡から学ぶ②」 講師：倉本幸弘氏(森鷗外記念館常任理事) 会場：講座室 定員：45名 料金：500円(教材費) 申込締切：5月15日(金)必着	6月14日(日) 10:30~12:00 鷗外講座応用編「鷗外宛書簡から学ぶ③」 講師：須田喜代次氏(大妻女子大学教授、森鷗外記念館常任理事) 会場：講座室 定員：45名 料金：無料 申込締切：6月3日(水)必着 教材に『文京区立森鷗外記念館蔵 森鷗外宛書簡集2(あーい編)』(平成31年)を使用します。予めご用意の上、ご参加ください。	6月14日(日) 13:30~15:00 鷗外講座応用編「鷗外宛書簡から学ぶ④」 講師：須田喜代次氏(大妻女子大学教授、森鷗外記念館常任理事) 会場：講座室 定員：45名 料金：無料 申込締切：6月3日(水)必着 教材に『文京区立森鷗外記念館蔵 森鷗外宛書簡集2(あーい編)』(平成31年)を使用します。予めご用意の上、ご参加ください。
--	--	---	---

### ◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@morigai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールでいたします。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

【ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。】

# 2020年度前期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

4月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

5月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

6月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

7月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

8月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

9月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

- コレクション展「父と母～鷗外ファミリー・ヒストリー」  
1月18日(土)～5月10日(日)
  - 特別展「森家の歳時記——鷗外と子どもたちが綴った時々の暮らし」  
5月16日(土)～7月26日(日)
  - コレクション展「手紙が語る鷗外像」(仮称)  
7月31日(金)～10月4日(日)
- 休館日

開館情報は予告なく変更になる場合があります。詳しくは当館までお問い合わせください。

特別展「荷風生誕140年・没後60年記念 永井荷風と鷗外」展は、1月13日に終了となりました。人気作家である荷風は、これまでも記念年に併せて、回顧展の開催や特集本の発行などが行われてきました。今回も当館の他、市川市文学ミュージアム(企画展「永井荷風と谷崎潤一郎展」)、江戸東京博物館(特別展示「永井荷風と江戸東京の風景」)、さいたま文学館(講座・展示「永井荷風の明治・大正・昭和」と様々な施設で特集企画が開催されました。各館と相互割引や資料借用などで連携し、また各館を「ハシゴ」してくださる方も多くいらっしゃり、荷風の記念年を盛り上げることができました。

また、同展は当館開館から15回目の特別展で、展覧会図録は15冊目の発行に至りました(当館では、特別展の開催に併せて展覧会図録を発行しています)。展覧会開幕から大変多くの方に図録をご購入いただき、残部わずかとなりました。当館では、売り切れの場合を除き、過去の展覧会図録の購入が可能です。通信販売も行っていますので、お求めの方はお問い合わせください。

## 編集後記

### ●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- ・JR線・京成線「日暮里」駅 南口 徒歩15分

### ●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
  - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
  - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511  
URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00(最終入館は17:30)

休館日 毎月第4火曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、  
年末年始(12月29日～1月31日)、及び展示替期間、植蒸期間等



## 交通案内

文京区立  
**森鷗外記念館**  
Mori Ogai Memorial Museum